

# 「資本論を読む会」便り

2022.2.9 No. 62

昨年12月の例会で、第4章第2節に入りました。ここでは、資本の一般的定式  $G-W-G'$  の矛盾について詳細に検討されています。

- ※ 編集人の復習ノート。報告や議論を踏まえて編集人はこう理解したということです。  
段落は、大月書店の全集版「資本論」本文の字下げで区切ります。しかし、レポーターのレジュメでは、いくつかの段落をまとめて1段落としている場合があります。ここではそれに従っています。  
段落名の後の小さい字は、(原著ページ番号)と、段落の出だしです。

## 第63回 第1巻 第2篇 第4章 貨幣の資本への転化

### 第2節 一般的定式の矛盾

第1段落 (170) 貨幣が繭を破って資本に成長する場合の流通形態は、…

資本に転化する貨幣の流通形態は、単純な商品流通の法則と矛盾する。

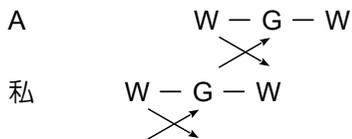
- 二つの流通形態の区別は、販売と購買の順序が逆になっている所にある。
- このような形式的な区別が、如何にしてこれらの過程の性質を変えるのか。

第2段落 (170) それだけではない。このような逆転が存在するのは、…

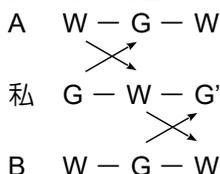
販売と購買の順序の逆転だけでは単純な商品流通の部面を越えることはできない。

- 販売と購買の順序の転倒(次の②)は、流通に関わる3人のうちの1人に存在するだけである。
- ①と②を比較する。

①私が単純な商品所有者の場合 商品をBに売り、Aから商品を買う。



②私が資本家の場合 Aから商品を買ひ、商品をBに売る。



- ・私にとって②は意味のある順序(2番目のG'の増加を期待)だが、A・Bにとっては特別な意味はない。A・Bは①②のどちらでも商品の売り手・買い手として登場するだけ。
- ・私自身もA・Bに対しては買い手・売り手として相対するだけ。貨幣または商品の動き以外の動きをする物の代表者になっているわけではない。

- ・②の全取引は要するに、Aは商品をBに売りBはAから商品を買う、になる。
- つまり、順序の転倒によっては価値を増殖させることはできない。
- 問題は、単純な商品流通の内に価値増殖を盛り込ませることが可能か、となる。

第1段落・第2段落の意味が分かりづらく議論になりましたが、上記のように要約したら少しはすっきりとしないでしょうか。上記要約中の図解は本文にはありませんが、私・A・Bのそれぞれの手の中での価値形態の変化と、商品・貨幣の持ち手変換の様子を見やすくするために入れました。

### 第3段落 (171) 流通過程が単なる商品交換として現われるような形態…

単純な商品流通では、使用価値に関しては商品交換する当事者両方が得をするが、交換価値に関しては何の得もない。つまり剰余価値は生まれない。

- 流通過程が単なる商品交換として現れるような場合、例えば、2人の商品所有者が互いに商品を買って、相互の貨幣請求額の差額を支払日に決済するという場合を考える。

貨幣

- ・商品の価値をその価格で表現するために計算貨幣として役立つ。
- ・差額を決済する支払手段として存在する。
- ・商品そのものに物として相対していない。

使用価値

- ・両者とも、自分にとって使用価値としては無用な商品を譲渡し、自分が使用するために必要な商品を手に入れる。
- ・専業による生産物の増産により、同一価値で多くの使用価値を取得できる。

交換価値

- ・両者とも、交換以前に持っていた価値を交換後も持っているだけ。
- ・交換は等価値の商品どうしで行なわれる。

- 貨幣が流通手段として機能する場合も同じ。
- 商品の価値は、商品が流通に入りこむ前に、その価格で表されている。  
価値は流通の前提であって、流通の結果ではない。

要するに、流通が商品の価値を形成しはしない、ということでしょう。

なお、交換価値の語は、ここでは価値の意味で使われているようです。この先も同様です。第1章では区別されていました。

### 第4段落 (172) 抽象的に考察すれば、すなわち、単純な商品流通の…

単純な商品流通は価値を殖やす手段ではない。

- 単純な商品流通を抽象的(その内在的法則から出てこない諸事情を度外視)に考察する。
  - ・ある使用価値と別の使用価値との交換である。
  - ・商品の単なる形態変換以外何も起こらない。
- この形態変換は、価値の大きさの変化を含まない。  
等量の価値が、同じ商品所有者の手の中に、とどまっているから。
  - ・最初 彼の商品の姿態で。

- ・次に この商品が転化される貨幣の姿態で。
  - ・最後 この貨幣が再転化される商品の姿態で。
- 商品の価値がこの過程で被る変換は、その貨幣形態の変換に限られている。
- ・最初 売りに出された商品の価格、
  - ・次に ある貨幣額＝すでに価格に表現されていた貨幣額、
  - ・最後 ある等価商品の価格
- として存在する。価値量の変化を含んでいない。
- 商品の流通は、商品の価値の形態変換のみをもたらすにすぎない限り、この現象が純粋に起こる場合に、等価物同士の交換をもたらす。  
交換価値で交換当事者の両方が得をすることはありえない。
- 商品は、その価値から背離れた価格で売られることもありえるが、それは商品交換の法則の侵害として現れる。
- 商品交換は、その純粋な姿態においては、等価交換であり、価値を増やす手段ではない。
- 価値の現象形態を固定すると資本の運動の連続性を見失う。  
「資本は貨幣である」、「資本は商品である」、とするのは一面的。

商品流通は、等価物同士の交換なので価値増殖はしない、ということです。  
それで、商品流通が価値増殖をもたらすとする議論には使用価値と価値の混同がある、というのが、次の段落です。

**第5段落** (173) それだから、商品流通を剰余価値の源泉として説明…

商品流通を剰余価値の源泉として説明しようと試みの背後には、使用価値と交換価値の混同がある。

- 例えばコンディヤックは使用価値と交換価値とを混同している。さらに、発達した商品生産の行われている社会を、生産者が自分の生活維持諸手段を自分で生産し自分の欲求を超える超過分・余剰分だけを流通に投じるような状態と、すりかえている。
- 現代の経済学者たちにあっても、商品交換の発達した姿態である商業を剰余価値を生産するものとして叙述しようとする場合、コンディヤックのような議論をくり返している。

等価物同士の交換では価値増殖しないというのであれば、不等価交換ではどうか、ということになります。以下6～9段落でこれを検討しています。

**第6段落** (174) もし交換価値の等しい商品どうし、または商品と貨幣とが、…

等価物どうしの交換では剰余価値は生まれません。そこで、非等価物どうしの交換を検討する。

**第7段落** (174) とにかく、商品市場ではただ商品所持者が商品所持者に相対…

商品市場ではただ商品所持者は売り手として、貨幣所持者は買い手として、相対するだけである。

- どの場合でも、商品市場では商品所有者が商品所有者に相対するだけであり、これらの人々がたがいに及ぼしあう力は彼らの商品の力だけである。
- 商品の素材の相違は、交換の素材的動機であって、商品所有者たちをたがいに相手に依存

させあう。

と言うのは、彼らのうちのだれ一人として自分の手の中に自分自身の欲求の対象をもっておらず、それぞれがその手の中に他人の欲求の対象をもっているからである。

- 商品の使用価値のこのような素材的相違のほかには、商品の間にはもう一つの区別、諸商品の現物形態(商品)と転化形態(貨幣)との間の区別が、あるだけである。
- すなわち、商品所有者たちは、売り手すなわち商品所有者として、および買い手すなわち貨幣所有者として、区別されるだけである。

**第8段落** (175) そこで、なにかわけのわからない特権によって、…

売り手に価格をつり上げる特権があっても、価値どおりの交換に帰着する。

- 特権によって、売り手が商品を価値以上に(例えば10%高く)売ることが許されると仮定する。しかし彼は、売り手であった後では買い手になる。結局、全ての商品所有者が自分たちの商品を互いにその価値よりも10%高く売りあうことになる。
- これは、彼らが商品をその価値どおりに売ったのと全く同じことになる。諸商品の価格は膨張するが、価値関係は不変のままなのである。

**第9段落** (175) 今度は、逆に、商品をその価値よりも安く買うことが…

買い手に安く買う特権がある場合も、全てはやはりもとのままである。

- 逆に、商品をその価値以下で買うことが買い手の特権だと想定する。しかし彼は、買い手になる前に売り手であった。買い手として10%もうける前に、すでに売り手として10%の損をしていた。
- 全てはやはりもとのままである。

これらの検討結果をまとめたのが、次の第10段落です。

**第10段落** (175) 要するに、剰余価値の形成、したがってまた貨幣の資本への…

価値以上での商品販売・価値以下での商品購入によっては、剰余価値は生まれない。

●結論

剰余価値の形成(=貨幣の資本への転化)は、売り手たちが商品をその価値以上に売ることによっても、また、買い手たちが商品をその価値以下で買うということによっても、説明することができない。

この節は微に入り細を穿つような展開になっている、という印象を受けます。本文にも注にも引用されているように、価値が増殖し得る理由についていろいろな説や論が出されているので、それらを批判しておく必要があったのだろうと、編集人は思いました(実際にそうのなかどうかは知りません)。読みこなすのが難しくなりますが、資本論の展開にスキを与えない効果をもたらしていると思います。

# 「資本論を読む会」便り

2022.4.12 No. 63

3月の例会で、第4章第2節を終えました。

※ 編集人の復習ノート。報告や議論を踏まえて編集人はこう理解したということです。  
段落は、大月書店の全集版「資本論」本文の字下げで区切ります。今回のレポーターのレジュメでは、いくつかの段落をまとめて1段落としている場合があります。ここではそれに従っています。段落名の後の小さい字は、(原著ページ番号)と、段落の出だしです。

## 第64回 第1巻 第2篇 第4章 貨幣の資本への転化

### 第2節 一般的定式の矛盾

前回の復習から始めました。

流通過程の中で価値が増殖する現象が見られるが、これは如何にして可能なのか、というのがここでの問題です。が、単純な商品生産・商品流通の下では、これは不可能です。不等価交換を前提したとしても、やはりダメです。Aさんが彼の商品を価値以上で売ることによって価値が増殖したように見えても、それはBさんの持っている価値を不当に取りあげただけです。現存する価値の配分が変わっただけで、増殖したことにはなりません。

第11段落 (176) そこで、問題外の諸関係をこっそりもちこんで、…

商品流通に生産者と消費者の観点を持ち込んでも、価値増殖は説明できない。

- 消費者が商品の価値よりも高く支払う能力を持っているとして、生産者の剰余価値の形成を説明する、主張がある。(トランズ大佐)
- これは、商品所持者が売り手として価値より高い価格で売る特権を持っているとするのと同じことで、やはり剰余価値の形成を説明することはできない。

生産者・消費者といっても、商品流通の場面では売り手と買い手として相対する商品所持者に過ぎません。したがって、トランズ大佐の主張は、商品所持者は売り手として価値以上の価格で売る特権を持っているというのと同じで、このことによっては価値増殖は得られないことは、すでに見た通りです(第8段落)。

第12段落 (176) それゆえ、剰余価値は名目上の値上げから生ずるとか、…

売ることなしにただ買うだけの階級を想定しても、剰余価値の説明にはならない。

- 剰余価値を、名目的な価格の引上げや商品を高すぎる価格で売る売り手の特権から生じるとすることは、生産することなしに消費するだけの一階級を想定することである。
- このような階級の存在は、単純な流通の立場からは、まだ説明ができない。
- 仮にこのような階級が存在するとする。この階級が購買に用いる貨幣は、交換なしに、無

償で、任意の法的小および暴力的権原に基づいて、商品所持者から絶えずこの階級に流れて行かなければならない。

- この階級に商品を価値以上に売ることは、無償で手放した貨幣の一部分をだまして再び取り戻すことである。歴史的には小アジアと古代ローマとの関係に見ることができる。

小アジアの例が持ち出されるのは、消費するだけの階級が存在している場合を検討しているからです。古代ローマと小アジアは、支配者と被支配者の関係です。ローマは小アジアに課税し、それによって小アジアから商品を買う階級として現われています。

小アジア人と古代ローマの関係についての説明の最後に「だまされた者はやはり小アジア人たちであった。」とあるがどういうことか、と質問がありました。

商品を価値以上の価格で販売することで小アジア人がローマをだましたように見えます。しかし、購買に使われた貨幣は元々小アジアから巻き上げたものですから、ローマは小アジアから商品をだまし取ったことになる、ということです。

### 第13段落 (177) そこで、われわれは、売り手は買い手であり…

問題は登場人物を人格化された範疇としてとらえているだけで、個人としてとらえてはいないということからきているのか。

- 売り手・買い手という流通当事者を、それぞれ性格をもった個人として捉えてこなかったから剰余価値を説明できなかったのではないか、という疑問を検討する。

### 第14段落 (177) 商品所持者Aは非常にずい男で、仲間のBやCを…

不等価交換は、価値の配分を変えても価値の総量を変えない。

- 流通当事者の個性を入れて検討する。Aはずい男、Bは騙されやすい男。

交換の前 Aは40£のぶどう酒を持つ。

Bは50£の穀物を持つ。 流通にある商品の価値総額は90£。

交換の後 Aは50£の穀物を持つ。

Bは40£のぶどう酒を持つ。 流通にある商品の価値総額は90£。交換前と同じ。

※価値の配分が変わったが、総額は変わっていない。

- 流通にある商品の価値総額を、その配分を変えることによつて増やすことは出来ない。  
∴ 個々人の商才の有無を考慮に入れても、剰余価値の形成を説明することはできない。

個々の流通当事者が利益を上げることと剰余価値の形成の違いを理解することが重要だ、という指摘がありました。儲ける人がいても価値の配分が変わっただけで、全体として価値は増加していないので、剰余価値が形成されたとは言えない、ということです。

### 第15段落 (177) 要するに、どんなに言いくるめようとしても、…

流通または商品交換によっては価値は増殖しない。

- 結論: 等価物どうしであれ、非等価物どうしの交換であれ、  
流通あるいは商品交換によっては、価値は増えないし創造されない。

**第16段落** (178) こういうことから、資本の基本形態、すなわち…

古い商業資本と高利資本をさしあたりまったく考慮に入れないのは、それらが等価交換ではないからである。

- 資本の根本形態を分析するに当たって、古代からある商業資本・高利資本をさしあたり考慮しない理由は次のとおり。
- ①高く売るために買う、 $G-W-G'$ 、は、本来の商業資本に純粹に現われている。ところが、商業資本の全運動は流通部面の内部で行なわれるが、貨幣の資本への転化、剰余価値の形成を、流通そのものから説明することは不可能。
- ②つまり、等価交換によっては、商業資本は成立しない。商品の購買者と販売者の間に商人が寄生的に割りこみ、両者からだまし取るということから、商業資本を導き出すほかない。
- ③商業資本の価値増殖の説明には、一連の長い中間項が必要だが、商品流通とその単純な諸契機とが唯一の前提となっている今の場合、それはできない。

古代の商業資本や高利資本は、資本主義的生産の規定的な資本形態である産業資本の勃興とともに、それに従属させられ組み込まれて、その派生的形態になったものとして、後に考察されます。(資本論 第3巻 第4編 商業資本)

**第17段落** (179) 商業資本にあてはまることは、高利資本にはもっと…

高利資本 $G-G'$ は商品交換からは説明できない。

- 古代からある商業資本の寄生性は、高利資本にはいっそうよく妥当する。
- 商業資本 貨幣は、購買と販売、つまり流通の運動によって、媒介されている。高利資本  $G-G'$  は、貨幣の性質と矛盾(一定量の価値を表わす)  
※商品交換の立場からは説明しえない形態である。
- アリストテレスは言う。
  - ①貨殖術は二重のもの A 商業に属す貨殖術  
B 家政術に属す貨殖術。必要で賞賛に値する。
  - ②前者Aは流通が基礎。非難されて当然。(∴自然に基づかず、相互の詐欺に基づく。)  
∴高利貸しが憎まれるのは全く当然。
  - ③高利貸しでは貨幣自体が利得の源泉  
貨幣が、商品交換のためという、本来の目的に用いられていない。  
利子は貨幣から生まれた貨幣で、すべての営利部門のうちで最も反自然的。

商業資本の場合は、仕入れた商品を遠隔地まで運び、それを販売して彼が投じた貨幣の何倍かのもを手に入れました。そこには流通の運動が不可避に必要です。しかし、高利資本にはこうしたものさえ無いので、その寄生性が際立っています。

なお、貨殖術(or 取財術)とは貨幣を獲得する活動です。また、家政術とは家の運営のことで、農業・従軍・家族・物資の獲得・奴隷や土地の使い方などを意味します。

**第18段落** (179) 商業資本と同様に利子生み資本もわれわれの研究の…

近代的な商業資本や利子生み資本は、派生的形態である。

●われわれの研究が進行すれば、

- ①商業資本・利子生み資本は、派生的形態として見いだされる。
- ②なぜそれらが歴史的に資本の近代的な根本形態よりも先に現われるのかを見る。

資本主義的生産様式の基礎的な資本形態は産業資本です。資本主義が勃興してくる過程で、それ以前に独立して存在していた商業資本や高利資本は、産業資本の体制の中に組み込まれ、その派生的形態(商業資本、利子生み資本)となりました。産業資本の循環過程の一契機が自立化したもので、商業利潤や利子は、産業資本が生産した利潤が分割されたものです。資本論 第3巻 第4編 商業資本 で詳しく述べられています。

**第19段落** (179) これまでに明らかにしたように、剰余価値は流通から…

流通の外部で、新価値を付加できるが自己増殖する価値ではない。

- 剰余価値は流通からは生じないのだから、剰余価値が形成されるのであれば、流通そのものの中では見えない何かが、流通の背後で起っている。  
そこで問題: 剰余価値は、流通以外のどこから生じうるのか?
- 流通は商品所持者たちの全ての相互関係の全体だから、流通の外部では、商品所持者は自分自身の商品と関係するだけである。
  - (1) 商品所持者と彼の商品の関係 (商品の価値に関して)
    - ・一定の社会的法則によって測られた彼自身の労働のある量をその商品が含んでいる。
    - ・この労働量は、商品の価値の大きさ、例えば10£という価格で表現される。
    - ・彼の労働は、商品の価値+商品自身の価値を超える超過分、に表わされない。
    - ・10£という価格は、労働量を表わしているから、それが11£に変化することはない。つまり、商品所持者は、彼の労働によって、価値を形成することはできるが、自己増殖する価値を形成することはできない。
  - (2) 商品所持者は、新たな労働によって現存する価値に新たな価値をつけ加え、商品の価値を高めることはできる。  
例えば革で長靴を作ると、その分多くの労働量を含む。  
よって、長靴は革よりも価値が大きい、革の価値は元のままである。  
結局、革は自己の価値を増殖しなかった。長靴製造中に剰余価値を生みださなかった。
- したがって、商品生産者が、流通部面の外で、他の商品所持者たちと接触することなしに、価値を増殖させる(=貨幣または商品を資本に転化させる)のは、不可能。

価値を付加(追加)することと、価値の自己増殖とは異なる、ということのようです。

**第20段落** (180) つまり、資本は流通から発生することはできないし、…

資本は流通から発生するわけにもいかないし、発生しないわけにもいかない。

**第21段落** (180) こうして、二重の結果が生じた。／貨幣の資本への転化は、…

こうして二重の結果が生じた。

貨幣の資本への転化は、

- ①商品交換の内在法則(等価交換)の下で実現しなくてはならない。
- ②しかも流通部面の中で行なわれてはならない。

# 「資本論を読む会」便り

2022.5.22 No. 64

4月の例会では、第4章第3節 労働力の売買 に入り、中ほどまで進みました。

※ 編集人の復習ノート。報告や議論を踏まえて編集人はこう理解したということです。  
段落は、大月書店の全集版「資本論」本文の字下げで区切ります。今回のレポーターのレジュメでは、いくつかの段落をまとめて1段落としている場合があります。ここではそれに従っています。段落名の後の小さい字は、(原著ページ番号)と、段落の出だしです。

## 第65回 第1巻 第2篇 第4章 貨幣の資本への転化

### 第3節 労働力の購買と販売

前回までのところで、価値増殖は、等価交換によっても不等価交換によっても生じないことが示されました。それで、どうやって増殖するのが問題となります。第2節 第19段落の最後に価値増殖は労働力商品によることを示唆している、と指摘がありました。この第3節への伏線でしょう。

第2節 20段落の「資本は流通から発生…、…。資本は流通のなかで発生…。」という二つの表現の違いについて質問がありましたが、特段の違いはなさそうです。

#### 第1段落 (181) 資本に転化するべき貨幣の価値変化は…

価値の増加は、その消費が価値を創造するという独特な使用価値を持つ商品(労働力)の購入と消費によって、行なわれる。

- 貨幣の価値増殖は、
  - ①貨幣(購買手段、支払い手段、蓄蔵貨幣)からは生じない。商品の再販売からも生じない。
  - ②流通部面で行われなければならない、かつ、流通部面で行われてはならない。
- 貨幣の価値増殖は、次のようにして可能である。
  - ①価値の変化は、価値の源泉であるという独特な使用価値の消費によって、生じる。
  - ②そのような使用価値を持つ商品(労働能力または労働力)が、市場(流通内部)に存在する。

商品の使用価値という語に対して、貨幣の使用価値を対比させる発言がありました。この使用価値の語は貨幣の自然的属性(例えば金)の使用価値(メッキに使うなど)ではなく、貨幣の機能のことでしょう。

「独特の属性を持つ一商品」という表現がでてきます。それに対し「一般的な」属性とは何かと質問がありましたが、次のようなことでしょう。

普通の商品は使用価値が価値の源泉であるという性質を持ちません。これが普通の商品の「一般的な」属性です。使用価値が価値の源泉であるという性質は「一般的」ではないので、

「独特の」属性というわけです。

**第2段落** (181) われわれが労働力または労働能力というのは、…

**労働力または労働能力とは？**

- 労働力または労働能力とは、人間の肉体・生きた人格性のうちに存在していて、何らかの種類の使用価値を生産するたびに運動させる、肉体的および精神的能力の総体。

この段落で労働力の意味を説明しています。

ところで、次の段落は「だが」で始まります。そこで、この段落の説明が次の段落では否定されるのかという質問がありましたが、そうではありません。

第1段落では、労働力という商品が市場に現われることで価値増殖が可能になると言っています。しかし労働力商品が市場に現われるのは無条件ではありません。第3段落でそのために必要な条件を説明するので、初めに「だが」が付けられていると考えられます。

**第3段落** (181) しかし、貨幣所持者が市場で商品としての労働力…

**貨幣所持者が商品としての労働力を市場で見いだすための条件。**

- <前提>
  - (2)商品流通において、商品交換者は販売者と購買者の区別があるが対等・平等である。
  - (5)労働力の所有者と貨幣所有者は市場で対等な商品所有者である。  
売り手と買い手の区別はあるが、法的に対等・平等である。
- <課題>
  - (1)貨幣所持者が商品としての労働力を市場で見い出すための条件は何か。
- <答>
  - (4)労働力所有者が自分の労働能力・自身の自由な所有者であることである。  
労働力を商品として販売する自由が必要だからである。
  - (6)この関係の成立には、労働力の販売はつねに一定の時間を限ってであることが必要。
  - (9)それは、いつでも一時的・一定の期間に限り自分の労働力を買い手の処分に任せ、労働力を譲渡しても所有権は放棄しない場合に限り可能である。
- <条件1(文(4))の詳細>
  - (2)商品流通において、商品交換者は販売者と購買者の区別があるが対等・平等である。
  - (3)労働力が商品として市場に現れるには、その持主によって販売される必要がある。
- <追加説明>
  - (5)労働力の所有者と貨幣所有者は市場で対等な商品所有者である。  
売り手と買い手の区別はあるが、法的に対等・平等である。
  - (7) (6)の理由 労働力を全部一度に売り払うことは自分自身を売ることであり、自分を自由人から奴隷に、商品所有者から商品に、転化してしまうから。

本文には「第1の」という語はありませんが、次の第4段落に「第2の」とありますから、この段落で説明されている条件は第1の条件ということになるでしょう。

この段落を要約するにあたり、段落内の文の順序を変えた方が分かり易くなるかも知れないと考えましたが、どうでしょうか。なお ( ) 内の番号は、段落内の文の元の順序を表わしています。

「労働力の自由な所持者」に関連して、児童労働の例が出されました。親が児童の労働力の処分権を持ち、児童自身が自分の労働力の自由な所有者になっていません。このことが児童労働をいっそう悲惨なものにしているのでしょう。

#### 第4段落 (183) 貨幣所持者が労働力を市場で商品として見出す…

**貨幣所有者が労働力を市場で商品として見いだすための第2の本質的条件**

- 労働力の所有者が、自分で生産した商品売ることができず、自分の労働力そのものを商品として売り出さざる得ないこと。

「自分で生産した商品売ることができない」とは、「作っても売れない」ということではなく、「自分で商品を生産できない」という意味です。生産できないのは、生産手段などの生産に必要なものを持っていないからです(第5段落)。これを「生産手段からの自由」(第6段落)と言う、と報告がありました。

この段落で、貨幣所有者が労働力を市場で商品として見いだすための2つ目の条件が示されたわけですが、この第1と第2の順序に意味があるという指摘がありました。労働力を商品として売りに出せる条件に加えて、労働力を売る以外にない人々が存在する(あるいは出現する)、ということかと思えます。

#### 第5段落 (183) ある人が自分の労働力とは別な商品売するためには、…

**自分の労働力とは異なる商品売するのに必要なもの。**

- 自分の労働力とは異なる商品売するのに必要なものは、
  - ・生産手段…原料、労働用具など。
  - ・生活手段…生産開始以前、生産期間、販売期間、の全ての時間に渡って。
  - ・生産期間、販売期間。

この段落は第3段落と第4段落のまとめになっている、という指摘がありました。

#### 第6段落 (183) だから、貨幣が資本に転化するためには、貨幣所持者は…

**貨幣を資本に転化させるためには、貨幣所有者は商品市場で自由な労働者を見いださなければならない。**

- 二重の意味での自由
  - ①自由な人格として、自分の労働力を自分の商品として自由に処分できる。
  - ②売べき他の商品を持たず、自分の労働力の実現に必要ないっさいの物から自由である。

「……いっさいの物から解き離されて自由であるという意味で自由な、……」とありますが、この「自由」は「〇〇がない」という意味です。tax free (非課税)、all free (アルコール・糖質・カロリー・プリン体など全部 0 のビール味飲料) の free です。

#### 第7段落 (183) なぜこの自由な労働者が流通部面で自分の前に…

**自由な労働者が流通部面で貨幣所有者に相対するのは、歴史的産物である。**

- なぜ自由な労働者が流通部面で貨幣所有者に相対するのか、については、ここでは問題に

しない。

- 明らかなことは、自然史的關係ではなく、先行の歴史的発展の結果であって、社会的生産の全ての一連の古い構成体の没落の産物である。

「自然史的關係」とはどういう意味かと質問がありました。「自然史」の語にはいくつか意味がありますが、「自然史的關係ではない」とは要するに「自然現象ではない」ということでしょうか。

#### 第8段落 (183) さきに考察した経済的諸範疇もまたそれらの歴史的な痕跡…

これまでに考察した経済的諸範疇も歴史的な痕跡を帯びている。

- 生産物が商品になるには、歴史的条件が存在している。  
他人のための使用価値を生産する社会的な分業が前提されている。
- 生産物の多くが、商品になるのは、資本主義的生産様式においてである。  
先行する社会では、商品になる生産物は限られていた。
- どのような事情で商品生産の変化が生じるのかを探求するのは、商品分析の課題ではない。
- 商品生産や商品流通は、社会的生産過程が交換価値に支配されていなくても行われる。  
生産物が商品として現れるのは、社会的分業がある程度発展していて、使用価値と交換価値の分離がすでに実現されていることを条件としている。
- 商品交換が生まれてくるのはどのようにしてか、まずは有用物と価値物との分離が生じ、やがて貨幣が生まれて、商品流通がますます発展してくる過程を学習した。そして価値形態の発展とは、まさにこうした商品交換が発展する過程において、価値関係のなかの価値表現という関係だけを取り出してそれを発展的に見たものだということが分かった。だから私たちが第1篇で考察したことはそうした商品交換の歴史的な発展過程を凝縮して分析的に考察したことでもある。
- われわれがこの分析でかわりあったのは、商品の形態で現われるかぎりでの諸生産物、諸使用価値であって、あらゆる生産物が商品として現われなければならないのは、どのような社会的経済的基礎の上でのことか、という問題ではないからである。

商品も貨幣も歴史的な産物だ、ということでしょう。

#### 第9段落 (184) あるいはまた貨幣に目を向けるならば、…

資本は、生産手段・生活手段の所有者が自由な労働者を市場で見いだす場合にのみ成立する。この歴史的条件は一つの世界史を包括する。

- 貨幣の特殊な形態……単なる商品等価物、流通手段、支払手段、蓄蔵貨幣、世界貨幣  
これらは商品交換の一定の発展を必要とするが、比較的わずかな発達で十分である。
- 資本の歴史的な存在条件……商品流通および貨幣流通と共に定在するものではない。  
生産手段・生活手段の所有者が、自らの労働力の売り手としての自由な労働者を市場で見いだす場合にのみ成立する。  
資本は、最初から社会的生産過程の一時代を告示する<sup>(41)</sup>。

原文にある注(41)を載せておきます。

「資本主義時代を特徴づけるもの。労働力が労働者自身にとっては彼に属する商品という形態を受け取り、彼の労働が賃労働という形態を受け取る、ということである。他面では、この瞬間からはじめて、労働生産物の商品形態が普遍化される。」

# 「資本論を読む会」便り

2022.6.18 No. 65

5月の例会は、第2篇 第4章 第3節 労働力の売買 の2回目でした。  
この節を読み終え、これで第4章を終わりました。

※ 編集人の復習ノート。報告や議論を踏まえて編集人はこう理解したということです。  
段落は、大月書店の全集版「資本論」本文の字下げで区切ります。段落名の後の小さい字は、(原著ページ番号)と、段落の出だしです。(なお、レポーターのレジュメでは、いくつかの段落をまとめて1段落としている場合があります。)

## 第66回 第1巻 第2篇 第4章 貨幣の資本への転化

### 第3節 労働力の購買と販売 (続き)

第10段落 (184) そこで、この独特な商品、労働力が、…

労働力も価値を持つが、どのように規定されるのか明らかにする。

第11段落 (184) 労働力の価値は、他のどの商品の価値とも同じに、…

労働力の価値とは、その所有者の生存を維持するのに必要な生活手段の価値である。

- 労働力の価値は、その生産に必要な労働時間によって決定される。  
労働力の生産とは労働者自身の再生産、つまり生存の維持である。  
労働者の生存の維持には一定量の生活手段が必要である。  
∴ 労働力の生産に必要な労働時間 = この生活手段の生産に必要な労働時間  
∴ 労働力の価値 = 労働力を維持するための、労働者の生活に必要な生活手段の価値
- 生活手段の総量は、労働者を正常な生活状態に置くのに十分でなければならない。  
労働力は、現実の労働において筋肉や神経や脳を働かせ、その力を発揮する。  
その結果消耗するので、労働力を回復・維持していく必要がある。  
よって、労働力の支出の増加には、生活手段の増加が必要となる。
- 労働力の価値には、精神的・歴史的要素が入る。  
生活手段は、国・時代で異なり、自然条件や文明度により異なるから。  
但し、ある与えられた国や時代においては、必要な生活手段の範囲は与えられている。

第12段落 (185) 労働力の所有者は死を免れない。だから、貨幣の…

労働力の価値には、その家族の生活維持費も入る。

- 個々の労働者は死を免れないから、損耗と死により労働力商品は市場からなくなる。  
労働力商品が常に市場に存在するためには、  
消失する労働力が新しい労働力によってたえず補充されなければならない。
- 故に、労働力の生産に必要な生活手段の内には、労働者の子供たちの生活手段を含む。

**第13段落** (186) 一般的な人間の天性を変化させて、一定の労働部門で…

技能の習得に必要な養成・教育費も、労働力生産に必要な価値に入る。

- 特定の発達した労働能力を得るためには、養成・教育が必要である。  
この費用は、割合は小さくとも、労働力の生産のために支出される価値の中に入る。

このほかに、病気や怪我の治療費（労働力の「修繕費」）も労働力生産に必要な価値に入ると、レポーターから補足がありました。

**第14段落** (186) 労働力の価値は、一定の総額の生活手段の価値に帰着する。…

労働力の価値は、生活手段の生産に必要な労働時間の大きさと共に変動する。

労働力の価値 = 生活手段の価値 だから当然です。

**第15段落** (186) 生活手段の一部分、たとえば食料や燃料などは、…

労働力1日の価値量。

- 生活手段の消費期間は長短さまざまである。 ∴その補填間隔も長短ある。  
例: 食物、燃料などは消費期間が短い。衣服、家具などは消費期間は比較的長い。
- 生活手段への支出は、日々の平均的収入によってまかなわれなければならない。  
∴ 1日に必要な平均収入額 = 1年に必要な生活手段への支出額 / 365日
- 1日に平均的に必要な生活手段に6時間の社会的労働が含まれているとし、  
1労働日を12時間とすると、  
毎日の労働力……半日(6時間)の社会的平均労働が対象化されている。  
この労働量が、労働力の日価値を形成する。( = 日々再生産される労働力の価値)  
半日の社会的平均労働が 1ターレル という金量で表わされるならば、  
労働力の日価値=1ターレル

**第16, 17段落** (187) 労働力の価値の最後の限界または最低限をなすものは、…

労働力の価値の最低限。

- 労働力の価値の最後の限界あるいは最低限をなすものは、  
労働力の担い手である人間の肉体的に欠くことのできない生活手段の価値である。  
肉体的最低限に引き下げられると、労働力そのものが萎縮した形でしか維持できなくなる。
- 商品の価値は、その商品を標準的な品質で供給するために必要な労働時間によって規定されている。労働力の価値規定も、労働力の本質から導かれたものである。

少子化が問題となっているのは、社会が必要とする労働力商品の量を維持できていないということだ、と指摘がありました。

非正規雇用の拡大や、賃金闘争の衰退などで、賃金が労働力の価値の最低限に引き下げられているのではないのでしょうか。ある訪問看護師は、訪問看護料とくらべ賃金があまりにも低く憤っていたそうです。少子化も低賃金の結果です。

**第18段落** (187) 労働能力のことを言っている人が労働のことを…

労働力と労働との違い。労働力が売れなければ労働者にとっては無である。

- 労働能力と労働は明確に区別される。あたかも消化能力と消化とが違うように。消化能力があっても、実際の消化には、健康な胃と、消化する食物を買う金が必要である。
- だから労働能力をいう人は、労働能力の維持に必要な生活手段を無視しているのではなく、むしろ生活手段の価値が労働能力の価値として表現されていると主張する。
- 労働能力は、売れなければ労働者にとって何の役にも立たず、自分の労働能力の生産のために一定量の生活維持手段を必要としたこと、その再生産のためにたえずくり返し新たにそれらを必要とすることを、冷酷な自然的必然事として感じる。

「消化能力と消化の違いの比喩は適当か？」と疑問が出されましたが、労働力と労働の違いを理解できればいいので、比喩の適否は問わないでおきます。

**第19段落** (188) この独自の商品、労働力の特有な性質は、…

販売された労働力は、その使用価値が実現した後に、支払いを受ける。

- 労働力という独特な商品の性質  
販売契約が結ばれても労働力の使用価値はまだ現実には買い手の手に移行していない。  
労働力の価値: 他の商品の価値と同様に、それが流通に入る前に規定されている。  
(労働力の生産のために一定量の社会的労働が支出されたから)  
労働力の使用価値: その後で行なわれる力の発揮の中で初めて存立する。  
∴ 力の譲渡と、力の現実の発揮(力の、使用価値としての定在)とは、時間的に離れている。
- 販売による使用価値の形式的譲渡と現実の引き渡しとが時間的に離れている商品の場合、買い手の貨幣は、たいてい支払手段として機能する。(例えば家賃など。)
- 資本主義的生産様式の行なわれている国では、労働力は、売買契約で確定された期限のあいだ機能し終えた後で、初めて支払いを受ける。つまり、労働者はどこでも、資本家に労働力を信用貸しする。
- 「信用貸し」は現実である。
  - ・資本家が破産すると信用貸しされた(労働力に対する)賃金の喪失が時おり生じる。
  - ・もっと後まで残る一連の影響によっても示されている(51)。
- 貨幣が購買手段であるか、支払手段であるかは、商品交換そのものの性質を変えない。労働力の価格は後になって初めて実現されるが、契約によって確定されている。そこで、資本に関わる諸関係を純粋につかむために、当面、次のことを仮定する。  
労働力の所有者はいつでもそれを売ればすぐに契約で決まっている価格を受け取る。

「労働力の信用貸し」を示す「もっと後まで残る一連の影響」については、資本論の注(51)に示されています。

労働力の販売ではその代金はたいてい後払いになります。一応説明はありますが(家賃の例は、第3章第3節貨幣と支払手段で取りあげられていました)、でもやっぱり何故?という疑問が出されました。賃金だけ受取って働かずに逃げるのを防ぐという、雇い主の思惑があったのかも知れません。

「家庭教師をしたことがあるけど先払いだった。」という方がおられました。「それは珍しい。」ということになりましたが、雇い主はその方に逃げられなくなかったのでしょうか。

**第20段落** (189) いま、われわれは、労働力というこの独特な…

流通過程から生産過程の考察へと進む。そこで貨殖の秘密が明らかになる。

- 貨幣所有者が受け取る労働力の使用価値は、労働力の消費過程において初めて現れる。
- 貨幣所有者は、原料その他の、この過程に必要なすべての物を商品市場で買い、それらに対して価格どおりに支払う。
- 労働力の消費過程は、同時に、商品の生産過程であり剰余価値の生産過程である。
- 労働力の消費は、他のどの商品の消費とも同じく、流通部面の外で行なわれる。よって、考察の対象を、流通部面から生産部面に移さねばならない。そこでは、どのようにして資本が生産するか。どのようにして資本そのものが生産されるか。が、明らかになり、貨殖(貨幣の増殖)の秘密がついに暴露される。

**第21段落** (189) 労働力の売買が、その限界のなかで行なわれる…

流通過程は自由・平等・所有・利己主義の基礎。

- 労働力の売買がその枠内で行なわれる流通または商品交換の部面は、天賦人權の真の楽園。ここで支配しているのは、自由、平等、所有、およびベンサムだけ。
  - ・自由！ 労働力の買い手と売り手は、彼らの自由意志によって規定されているだけである。彼らは、自由で法律上対等な人格として契約する。契約は、彼らの意志が一つの共通な法的表現を与えられる最終結果である。
  - ・平等！ 彼らは商品所有者としてのみ互いに関係しあい、等価物と等価物を交換する。
  - ・所有！ 誰もみな、自分の物を自由に処分するだけである。
  - ・ベンサム！ 両当事者のどちらにとっても、問題なのは自分のことだけである。彼らを結びつけて一つの関係の中に置く唯一の力は、彼らの自己利益、彼らの特別利得、彼らの私益という力だけである。
- 誰もが自分自身のことだけを考えて、誰もが他人のことは考えないからこそ、全ての人が、事物の予定調和にしたがって、またはまったく抜け目ない摂理のおかげで、彼らの相互の利得、共同の利益、全体の利益という事業を成しとげる。

**第22段落** (190) この、単純な流通または商品交換の部面から、…

流通過程の自由・平等の関係から、生産過程の資本と賃労働との対立の関係へ。

- 流通過程から、俗流自由貿易論者は、資本および賃労働の社会についての見解、概念、自己の判断の基準を引き出す。
- 生産過程に移ると、資本家と労働者の対立が現れる。
  - 貨幣所有者 → 資本家 意味ありげにほくそ笑みながら、仕事一途。
  - 労働力所有者 → 資本家に従う労働者 おすおすといやいやながら。

前半は、流通過程の平等や自由の観念から、生産過程における資本家と労働者の対立や資本家の利害を覆い隠す見解が導き出される、ということです。

ところが、生産過程に移ると資本家と労働者の対立が現れますが、それを当事者たちの顔つきが変わる、ということで表現しています。

# 「資本論を読む会」便り

2022.7.18 No. 66

6月は、第3篇 第5章 絶対的剰余価値の生産 に入り、第1節 労働過程 を半分ほど読み進みました。例会は、数段落をまとめてレポーターが報告し、そのあと議論する、という形で進めています。

※ 編集人の復習ノート。報告や議論を踏まえて編集人はこう理解したということです。  
段落は、大月書店の全集版「資本論」本文の字下げで区切ります。段落名の後の小さい字は、(原著ページ番号)と、段落の出だしです。

## 第67回 第1巻 第3篇 絶対的剰余価値の生産 第5章 労働過程と価値増殖過程

第1篇は商品から始まり、貨幣が誕生し、第2篇 第4章 で資本が登場しました。資本とは、増殖する価値のことですが、商品流通では増殖できません。第4章 第3節で、価値の増加は、労働力(その消費が価値を創造するという独特な使用価値を持つ商品)の購入と消費によって、行なわれることが明らかにされました。第3篇以降では、この価値増殖のからくりが明らかにされます。

### 第1節 労働過程

**第1段落** (192) 労働力の使用は労働そのものである。…

労働力の買い手は、労働力を使用し(=労働者に労働させて)、労働力を消費し、商品を生産させる。

商品は使用価値である。使用価値の生産は、資本主義的生産の下でも、その一般的な性質を変えない。そこで、労働過程について、当面、特定の社会的形態とは切り離して考察する。

**第2段落** (192) 労働は、まず第一に人間と自然との間の一過程である。…

労働とは何か。……労働の一般的規定。

- 労働は、まず第1に、人間と自然との間の過程である。この過程で人間と自然との物質代謝を媒介し、規制し、制御する。
- 人間は肉体に備わる自然力(腕・脚・頭・手など)を動かし、自然素材を自分の生活に使える形にする。また、不要なものを捨てる。
- 同時に、人間は、この運動によって自分自身の自然(天性)を変化させる。自分自身のうちに眠っている潜勢力を発現させ、その力の営みを彼自身の統御に従わせる。
- ここでは、労働の最初の動物的な本能的な形態は問題にしない。頭の中に描いた生産物を現実の物にする、そういう人間の労働を問題にする。
- 労働者は、自然的なもののうちに、同時に彼の目的を実現させる。その目的は、法則として彼の行動の仕方を規定する。彼は自分の意志をこれに従わせなければならない。注意力として現れる合目的的な意志は、労働の継続期間に渡って必要である。それは、労働者が労働を彼自身の肉体的および精神的力の自由な営みとして享樂することが少なければ少な

いほど、ますます必要になる。

### 第3段落 (193) 労働過程の単純な諸契機は、合目的な活動…

#### 労働過程の3要素

- ①合目的な活動(労働自体)
- ②労働対象 労働を加える対象
- ③労働手段 労働するために使われる手段

### 第4段落 (193) 人間のために最初から食料や完成生活手段を…

労働対象は大きく2種類に分けられる。

- ①自然に存する物 例:土地(水も)、魚、木、鉱石など。
- ②生産された物 原料と呼ぶ。 例:これから洗鉱される採掘された鉱石など。

### 第5段落 (194) 労働手段とは、労働者によって彼と労働対象とのあいだに…

労働手段とは。

- 労働手段は、労働者と労働対象との間に入って労働対象への働きかけを媒介する。
- 労働者が直接に支配するのは労働手段である(手で果実をもぎ取る場合などを除く)。その結果、労働手段は労働者自身の活動器官化する。
- 労働過程の発達には加工された労働手段が必要である(人類史の発端での石器など)。そのため、労働手段の使用や創造は労働過程を特徴づける。
- 何が作られるかではなく、どんな方法でどんな労働手段で作られるかが、いろいろな経済的時代を区分する。労働手段は、人間の労働力の発達を示すだけでなく、労働がその中で行なわれる社会的関係を表わしている。例えば、機械系労働手段は、一つの社会的生産時代(マニュファクチュアから大工業への発展期)の決定的な特徴を示している。

### 第6段落 (195) もっと広い意味で労働過程がその手段のうちに数えるもの…

広い意味での労働手段

- 直接には労働過程に入らないが、それなしでは過程は進まないか不完全になるもの。  
例:土地(労働者立つ場所、仕事の場を与える)、作業用の建物・運河・道路など。

この節の標題について、レポーターから英語版では「労働過程または使用価値の生産」となっていると紹介がありました。これに対し、仏語版ではないかという指摘がありました。帰宅してから確認すると、レジメのとおり英語版が正しいようです。因みに仏語版では「使用価値の生産」となっています。

労働過程を使用価値の生産という観点で考察するということでしょう。

どの社会にも共通する使用価値の生産の分析から始めるのは何故か、という質問がありました。第1段落に、使用価値の生産は資本主義的生産の下でもその一般的な性質を変えないからだ、という説明があります。資本主義的生産では使用価値の生産に剰余価値の生産という側面が加わるのですから、分けて考察することでその特徴を明確にすることができる、とレポーターから説明がありました。

第2段落は労働の概念の説明ですが、その中で、目的意識的活動というのは一つの重要な契機だと思われます。動物の「労働」との違いは、道具を製作する労働をする(第5段落)という点で際立っています。

第3段落の原文は「労働過程の単純な諸契機は……」となっていて、この「契機」の意味について質問がありました。広辞苑によれば、「①[哲]要素が素材的要因であるのに対し物事の動的要因となるもの。ヘーゲル弁証法の用語としては、全体が弁証法的運動である場合の必然的な通過段階をいう。②動因。ある事象を生じさせるきっかけ。…」とあります。労働対象や労働手段は素材的ですし、日常的な用法では「要素」に動的要因を含むこともあるようなので、「要素」と言い換えても取り敢えずは差し支えなさそうです。

第4段落で、労働対象のうち生産物であるものを特に「原料」と呼ぶ、と言っています。普段使っている「原料」とは多少ニュアンスが異なるようです。「製品になった時、もとの形が残っていないものをいうことが多い」(広辞苑)からでしょう。

**第7段落** (195) 要するに、労働過程では人間の活動が労働手段を使って…

- 労働過程は、人間が労働手段を使って労働対象に意図した変化を引き起こす活動である。
- 出来上がった生産物では労働過程は消えている。つまり、労働(という人間の活動)は生産物に対象化されている。

**第8段落** (196) この全過程をその結果である生産物の立場から見れば、…

労働過程の要素	生産物の立場から見ると、
労働手段	} 生産手段
労働対象	
労働	生産的労働

第8段落の「生産的労働」には、注(7)「生産的労働のこの規定は、単純な労働過程の立場から生じるのであって、資本主義的生産過程にとっては決して十分なものではない。」が付いているが、この注は重要だ、という指摘がありました。資本主義的生産過程における「生産的労働」は、発展した概念規定を受ける、ということです。

労働対象と労働手段を合わせて生産手段と言うことについて、例会の間ではそのまま受け入れたのですが、よく考えてみると、編集人は「生産物の立場」というのをよく理解していないようです。次の例会でどなたか教えて下さい。

**第9段落** (196) ある一つの使用価値が生産物として労働過程から…

- 生産物は、労働過程の結果であるだけでなく、労働過程の条件でもある。
- つまり、労働過程の結果の生産物には、次の労働過程の生産手段になっているものもある。

**第10段落** (196) 鉱山業や狩猟業や漁業など(農業は、最初に処女地そのものを…

- 労働対象が天然に与えられている採取産業を除き、他のすべての産業部門の労働対象は、原料(=労働生産物である労働対象)である。
- 労働手段の大多数は、労働生産物である。

**第11段落** (196) 原料は、ある生産物の主要実体をなすことも、…

- 原料は次の2種類に分けられる。
  - ①生産物の主要実体をなすもの
  - ②補助材料
- 補助材料には、次のような種類がある。
  - ①労働手段によって消費される物      例:燃料など
  - ②原料の素材的变化を起こす添加物      例:漂白剤など
  - ③労働の遂行を補助する物              例:作業場の照明など
- 化学工業では、主要材料と補助材料との区別はあいまいである。

**第12段落** (197) 物はそれぞれさまざまな性質をもっており、…

- 物は多様な性質を持つので、同じ生産物が様々な労働過程の原料となりうる。  
例:穀物が原料であるのは、製粉業、澱粉製造業、酒造業、牧畜業、農業…。

**第13段落** (197) 同じ生産物が同じ労働過程で労働手段としても…

- 同じ生産物が同じ労働過程で労働手段としても原料としても役立つことがある。  
例:家畜の肥育…加工される原料であり、肥料製造の手段でもある。

**第14段落** (197) 消費のために完成された形態で存在する生産物が、…

- 消費のための完成生産物が、新たに別の生産物の原料になることもある。半製品または中間製品と呼ばれる生産物は、原料として使うための労働生産物である。
- 完成生産物に至るまでに、何度も労働過程を経る原料もある。

**第15段落** (197) 要するに、ある使用価値が原料か労働手段か生産物かの…

- ある使用価値が、原料・労働手段・生産物のうちどれとして現われるかは、それが労働過程で行なう機能によって変わる。

**第16段落** (197) それだから、生産物は、生産手段として新たな労働過程に…

- 生産物は、生産手段として新たな労働過程に入ることによって生産物という性格を失い、労働の対象的要因(労働手段、労働対象)として機能するだけである。
- もし労働過程にある生産手段が過去の労働の生産物としての性格を感じさせるとすれば、その使用価値に欠陥がある場合である。

**第17段落** (198) 労働過程で役だっていない機械は無用である。…

- 労働過程で用いられない労働対象・労働手段は、朽ちて廃物となる。  
労働は、労働過程において、労働対象・労働手段を消費しつつ、新たな使用価値(個人的消費手段または生産手段)を形成する。

第8段落で生産物の立場というのが出てきたが、以降の段落ではその立場で論じられているのではないかと、という指摘がありました。

また、労働過程に関して微に入り細に入り検討しているが、当時の経済学でいろいろな見解が出されているので、それらを批判する意味もあるからではないかと、という意見がありました。

# 「資本論を読む会」便り

2022.10.6 No. 67

第3篇 第5章 以降では、価値増殖のからくりが明らかにされています。9月は、その第1節労働過程の後半を読み、この節を終えました。

※ 編集人の復習ノート。報告や議論を踏まえて編集人はこう理解したということです。  
段落は、大月書店の全集版「資本論」本文の字下げで区切ります。段落名の後の小さい字は、(原著ページ番号)と、段落の出だしです。

## 第68回 第1巻 第3篇 絶対的剰余価値の生産 第5章 労働過程と価値増殖過程 第1節 労働過程

レポーターから、資本論の始めから今読んでいる所までの大まかな流れが報告されました。前回読んだ、第3篇 第5章 労働過程と価値増殖過程 第1節 労働過程 の前半、1～18段落について項目を列挙すると、次のようになるでしょうか。

- ・労働力の使用は労働そのもの。
- ・労働力の買い手は労働力の売り手に労働をさせることで、労働力を消費。  
資本家が労働者に作らせるものは、ある特殊な使用価値、ある一定の品物。
- ・使用価値または財貨の生産は、資本家のために資本家の監督のもとで行われても、その一般的性質を変えない。
- ・労働過程は、まず第一に、特定の社会形態に関わりなく考察される必要がある。
- ・人間にとっての労働の役割  
労働は、人間と自然との間の一過程。  
労働が自然に働きかけ、自然物を変化させ、人間の目的を実現。
- ・労働過程の諸契機
  - a 労働: 人間が、労働手段を使い、企図された労働対象の変化を引き起こす。
  - b 労働対象: ①天然に存在する労働対象  
②労働生産物である労働対象 = 原料 (例: 鉱山から取り出した鉱石)
  - c 労働手段: 労働者と労働対象との間に入り、労働対象への働きかけに役立つ物  
一般的な労働手段もある。土地・仕事場・建物・運河・道路など
- ・労働過程は生産物では消えている。
- ・生産物の立場から見ると 労働手段と労働対象は…生産手段  
労働は……………生産労働 として現れる。
- ・生産物は、生産手段にもなる。
- ・採取産業以外のほとんどの産業の労働対象は、原料すなわち労働生産物。
- ・原料 生産物の主要実体をなすことも、補助材料であることもある。
- ・同じ生産物が、様々な労働過程の原料となる。ある使用価値が、原料・労働手段・生

産物のどれなのかは、労働過程で占める位置による。

第3篇では、剰余価値がどうして生まれるかがポイントであるという指摘がありました。また、第8段落で生産物の立場、というのが出てくるが、資本家の立場につながるのでは？ という意見もありました。

ほかに、生産物が次の生産の要素となる、ということは、押さえておきたいところです。

**第18段落** (198) このように、現にある生産物は労働過程の結果であるだけでなく…

**直接的消費対象ではない労働生産物(原料)の労働過程への投入は、これら過去の労働生産物を使用価値として維持し実現するための唯一の手段である。**

**第19段落** (198) 労働はその素材的諸要素を、その対象と手段とを消費し、…

**労働は、労働対象・労働手段の消費過程である。**

- 個人的消費の生産物は、消費者そのものである。
- 生産的消費の結果は、消費者とは区別される生産物である。

レジュメに「生きた労働は、過去の生産物の一つの使用価値の消滅と別の新しい使用価値の生成という使用価値の転成によって新しい生産物のなかに引き継ぎ、維持していく。」とあるが、何を「…引き継ぎ」ぐのか分かりにくい、と質問がありました。

第18段落の原文は「使用価値として維持し実現する…」となっています。この場合、新しい生産物が同じ使用価値を持つということではなく(同じなら新しく生産する必要がない)、使用価値を持つという性質が維持されるということです。つまり、原料は使用価値を持ち、生産物もまた(別の種類の)使用価値を持つ、ということです。

**第20段落** (198) その手段やその対象がそれ自身すでに生産物であるかぎりでは、…

**労働過程のまとめ**

- 生産物が消費される過程、それによって新たな生産物をつくる過程。  
生産物で新しい生産物を作る過程といえる。
- しかし、天然に現存する・労働生産物ではない生産手段も、今なお用いられている。

**第21段落** (198) これまでにわれわれがその単純な抽象的な諸契機について…

**労働過程を単純で抽象的な要素において叙述してきた。**

- これまでの単純で抽象的な要素において叙述してきたような労働過程は、人間生活のどんな形態からも独立し、人間生活のすべての社会形態に共通で、
  - ・使用価値を生産するための合目的的活動
  - ・人間の欲求を満たす自然的なものの取得
  - ・人間と自然とのあいだにおける物質代謝の一般的な条件
  - ・人間生活の永遠の自然的条件であった。
- そのため、労働者を他の労働者との関係において叙述する必要がなかった。

生産過程は労働過程とどう違うのかと、質問がありました。広辞苑によると「労働によって原料から生産物を作り出す過程。一定の生産様式の支配する社会にはそれぞれ特有の形態があり、資本主義社会では、剰余価値を生産する過程でもある。」ということでしたが、これだと労働過程とあまり変わらないようにも思えます。労働に着目したとき労働過程、生産物に着目したとき生産過程、と言うようにも思えます。

資本論辞典も見ましたがよく分かりませんでした。さわりの部分を引用しておきます。

**【労働過程】** 人間が各種の欲望を充足するために行なわなければならない各種の使用価値の生産は、つねにある時間的長さをもつ一つの過程として、すなわち<生産過程>としてあらわれる。生産過程は、それが商品の生産として、資本家のために、資本家の管理のもとに行なわれることによって、その一般的性質を変えるものではない。生産過程は、まず第一に、すべての社会形態に共通な<労働過程>として考察される。(以下略)

**【生産過程】** ある一定の使用価値をつくり出すという合目的的活動としての労働は、その結果が生産物であるという点からみれば、生産である。すべて、生産は、ある時間的経過のうちに、その現実の諸条件(労働力、労働対象、労働手段)の一定の変化をもたらすところの、一つの過程であり、かような物として、生産は生産過程である。(以下略)

**第22段落** (199) われわれの将来の資本家のところに帰ることにしよう。…

ここから資本のもとでの労働過程を考察する。

- どんな社会形態にも依存しない・共通している関係として、労働過程を考察してきた。
- ここから資本家のもとでの労働過程を考察する。
- 資本家は、商品市場において労働過程に必要なすべての要因、对象的要因または生産諸手段と、人的要因または労働力とを買った。資本家は、
  - ・彼の事業にふさわしい生産手段と労働力を選んだ。
  - ・自分の買った商品、労働力の消費にとりかかる。
  - ・労働力の担い手である労働者に、その労働によって生産手段を消費させる。
- 労働過程の一般的性質は、労働者が資本家のために行なうことによっては、変化しない。
- 製造方法や、労働力など、さしあたりは変化しない。
- 労働が資本のもとに従属することによって生じる生産様式そのものの転化は、もっと後になってからはじめて生じる。故にもっと後になって考察される。

資本による生産様式の転化については、第4篇「相対的剰余価値の生産」で扱われていると、説明がありました。

労働過程に対して一般的労働過程とは何か、と疑問が出されました。

第1段落に、使用価値の生産は、資本主義的生産の下でもその一般的な性質を変えないので、労働過程について、まず第1に特定の社会的形態とは切り離して考察する、とありました。このようにして捉えられた労働過程を一般的労働過程と言っています。

前段落 これまでの単純で抽象的な要素において叙述してきたような労働過程

この段落 どんな社会形態にも依存しない・共通している関係としての労働過程  
と言っています。

**第23段落** (199) ところで、労働過程は、資本家による労働力の消費過程として…

資本家による労働力の消費過程として行なわれる労働過程は二つの特有な現象を示す。

**第24段落** (199) 労働者は資本家の監督のもとに労働し、…

第一。労働者は資本家の監督下で労働し、労働は資本家に属す。

- 労働力…資本家に購入され、資本家のものになり、その使用は労働そのもの。
- 故に、労働過程は資本家のもの。資本家は労働者を監督し、労働過程を監視する。

**第25段落** (200) また、第二に、生産物は資本家の所有物であって、…

第二。生産物は資本家の所有物で、直接的生産者である労働者の所有物ではない。

- 労働力は資本家に購入されたので、その使用は資本家に属す。
- 資本家は、労働過程において労働力を消費し、彼に属す生産物形成要素に、合体させた。
- 労働過程は、資本家に所属す物の間の一過程であり、その過程の生産物は彼に所属する。

英語版では第24段落に「第一に」という語句があるそうです。第23段落で「二つの特有な現象を示す」と言っていますから、文章の構成からも、第24段落が「第一」の特有な現象ということになります。

ここでは、資本主義的生産に特有な現象として、特にその第2、生産物が資本家の所有になることが重要だと思われまます。

原文に「資本家は、労働力のたとえば1日分の価値を支払う。」とありますが、この「1日分の価値」あるいは「日価値」について少し議論になりました。

労働力の1日分の価値については、第4章第3節 労働力の購買と販売 のところで出てきました。労働力の価値とは、その所有者の生存を維持するのに必要な生活手段の価値である、と規定されています。

その生活手段の消費期間は長短さまざまであるので、その補填期間も長短さまざまであり、生活手段への支出は日々の平均的収入によってまかなわれことになります。1日に平均的に必要な生活手段に6時間の社会的労働が対象化されているとすると、これが労働力1日分の価値、ということになります。

仮に、1労働日を12時間とし、半日(6時間)の社会的平均労働が 1ターレル という金量で表わされるならば、労働力の日価値=1ターレル、となります。

労働力を1日分購入して、1日労働させるには、1ターレルを支払わなければなりません。

「日価値」と関連して、ここで「1日」の意味を考えてみます。「労働力1日分の価値」と言うときの「1日」は、「所有者の生存の維持」ということから考えて、24時間でしょう。

しかし、「1日労働させる」の「1日」は「1労働日を12時間」とありますから、12時間です。気をつけないと混乱しそうです。

# 「資本論を読む会」便り

2022.11.19 No. 68

今回、また新しい参加者をお迎えすることができました。一同、簡単な自己紹介をした後、早速 第3篇 第5章 絶対的剰余価値の生産 第2節 価値増殖過程 に入りました。

※ 編集人の復習ノート。報告や議論を踏まえて、いくつかの段落をまとめつつ、編集人の理解したところを書きました。段落は、大月書店の全集版「資本論」本文の字下げで区切ります。段落名の後の小さい字は、(原著ページ番号)と段落の出だしです。行頭の [数字] は段落番号です。

## 第69回 第1巻 第3篇 絶対的剰余価値の生産 第5章 労働過程と価値増殖過程

### 第2節 価値増殖過程

商品は使用価値と価値という二面性を持っています。したがって、商品の生産過程においても使用価値の生産と価値の生産という二つの側面を持ちます。第1節で使用価値の生産を分析しましたが、第2節では価値生産を分析し、価値増殖の秘密を明らかにします。

(※以下では質量の単位「ポンド」を表す記号「lb」を使います。)

**第1段落** (200) 生産物 — 資本家の所有物 — は、ある使用価値、…。

～ **第4段落** (201) われわが知っているように、どの商品の価値も、…

[1] 資本家による生産の目的は次の2つです。

- 1) 交換価値を持つ使用価値＝商品を、生産すること。
- 2) 生産に必要な生産手段と労働力の価値総額以上の価値の商品を、生産すること。

[2] 商品が使用価値と価値との統一であるのと同様、商品の生産過程は労働過程と価値形成過程との統一なので、前節では労働過程を考察しました。

[3] そこで、生産過程を価値形成過程として考察することになります。

[4] 労働過程の結果の生産物に対象化されている、労働の量を計算します。商品の価値は、商品を生産するために社会的に必要な労働時間によって、規定されているからです。

**第5段落** (201) たとえば、生産物が糸であるとする。…。

～ **第12段落** (203) われわれは、今では、生産手段、綿花と紡錘が、…。

[5] 生産物は糸(訳によっては、綿糸、撚糸)であるとします。紡錘(労働手段を代表)と綿花(労働対象)が紡績過程で結合して糸に転化しますが、このときそれらの価値は変化しません。

[6] そこで、糸に対象化されている労働の量の計算してみます。

生産手段の価値 1) 労働対象(原料) 綿花 10 lb の価値 = 10 シリング  
2) 労働手段 紡錘 1/4 錘の価値 = 2 シリング

12シリングの金=2労働日(24労働時間)の生産物  
とすると、

10シリング+2シリング=12シリング=2労働日(24労働時間)  
の労働が、10 lb の糸に対象化されています。

- [7] 同じ労働時間(2労働日)が、一方では糸、他方では綿花と紡錘において、自らを表わしていると言えます。
- [8] 綿花の生産に必要な労働時間も、紡錘の生産に必要な労働時間も、糸の生産に必要な労働時間の一部分なので、糸に含まれることとなります。
- [9] 糸に含まれている労働はすべて過去の労働であり、早い段階か最近だったかに関わりなく価値形成において同等です。労働材料・労働手段に含まれる労働時間は紡績労働よりも前の一段階で支出されただけであり、家の建築初日の労働も最終日の労働も家に合体された総労働時間を同等に形成するのと同じことです。
- [10] 生産手段(綿花と紡錘)の価値(12シリング)は、糸(生産物)の価値の構成部分をなすが、
- [11] そのためには、2つの条件が必要です。
- (1) 生産手段は現実に、使用価値の生産に役だつこと。
  - (2) 与えられた社会的生産条件の下に必要な労働時間だけが費やされること。
- [12] こうして、
- 糸10 lb の価値 = 生産手段(綿花と紡錘)の価値 + 紡績労働が付け加える価値  
の右辺の最初の項は 12シリング(2労働日)となったので、次は、2番目の項「紡績労働が付け加える価値」が問題になります。

<第7段落>の原文に「40 lb の糸の価値 = 40 lb の綿花の価値+1錘 の紡錘の価値 とすれば、…、一般的価値法則にしたがって、たとえば 10 lb の糸は、10 lb の綿花と 1/4 個の紡錘との等価物である。」とあります。ここで「一般的価値法則」という語が初めて出てきますが、特に説明がありません。

資本論辞典には「一般的価値法則」の項目がないので、「価値法則」の項を見ると、「I 価値規程 商品の価値は、その生産に必要な社会的労働によって規定される(以下略)。/ II 価値法則と価値規程 価値法則とは、<価値規程>を基礎にして、商品の生産と交換を規制する根本法則である。すなわち、商品の価値はその生産に必要な社会的労働によって規定される、という価値規程を基礎にして、その価値規程の展開する内的法則が価値法則にほかならない(以下略)。/(さらに、III、IV、V、VI、VIIと続くが、略)」とあるのですが、分かり難いです。

取り敢えず件の箇所は、生産物の価値はその使用価値としての分量に比例する、として理解できるかと思われまます。

<第11段落>の本文に、「2つの条件」に関して、「もし1 lb の糸を紡ぐために1 lb の綿花だけが必要であるならば、1 lb の糸の形成においては、1 lb の綿花だけが消費されるようにしなければならない。」とあります。もし 2 lb の綿花が消費されるなら、1 lb の綿花が無駄になる訳で、生産条件が社会の標準的な生産条件以下だということになります。この無駄になった 1 lb の綿花の価値は生産物である糸の価値に入りません。

**第13段落** (203) われわれはこの労働を今度は労働過程の場合とは…。

～ **第21段落** (205) この結果は、それ自体としては奇異なものではない。…。

[13] 労働過程を価値形成の観点から考察します。紡績労働は価値源泉である限り他の労働と同等です。今、紡績労働が、単純労働・社会的平均労働である、と仮定します。但しこれと反対の仮定をしても事態は変わりません(参照: 第32段落)。

[14] 1時間の紡績労働は、綿花に対象化されて、綿花を糸に転化します。

[15] 綿花の糸への転化継続中には、社会的に必要な労働時間だけが消費されます。例えば、平均的な社会的生産条件では  $a$  lb の綿花が1労働時間中に  $b$  lb の糸に変えられているとします。ある紡績工場では  $a$  lb の綿花を  $b$  lb の糸に変えるのに2労働時間が必要だとしても、この工場から出荷される糸  $b$  lb に対象化されている労働の量は 1労働時間です。

[16] 価値を形成する労働という側面から考察すると、原料はある量の労働を吸収し糸(生産物)に転化すると言えます。したがって、一定量の生産物は一定量の凝固した労働時間を表わします。例えば、10 lb の糸は吸収された6労働時間を表わします。

[17] 価値形成の面から労働・原料・生産物を考察する場合、それらの種類は無関係です。

[18] 労働力の日価値 = 3シリング = 6労働時間 と前提されています(参照: 第4章 第3節 労働力の購買と販売 第15段落)。

紡績労働 6時間で綿花 10 lb を糸 10 lb に転化するとすれば、綿花は 6労働時間を吸収します。6労働時間は金で3シリングなので、綿花はこの紡績労働によって3シリングの価値を追加されます。

[19] 以上をまとめると、生産物(10 lb の糸)の総価値は次のようになります。

綿花 10 lb の価値	10 シリング	20労働時間
紡錘 1/4 錘の価値	2 シリング	4労働時間
+) 紡績労働 6時間	3 シリング	6労働時間
糸 10 lb の総価値	15 シリング	30労働時間

[20] つまり、生産物の価値は前貸しされた資本の価値に等しく、価値は増殖せず・剰余価値を生まず・貨幣は資本に転化していません。

生産物 15シリング (糸 10 lb の価格)

前貸し 15シリング (生産物の形成要素に商品市場で支出)

(10シリング(綿花) + 2シリング(消耗した紡錘) + 3シリング(労働力))

[21] この関係は商品交換のルール通りの結果です。

<第13段落>の本文に「綿花と紡錘とは紡績労働の生活手段として…」とありますが、いささか意味不明です。原語の *Lebensmittel* には食料品という訳もあるので、綿花と紡錘は紡績労働が消費する対象、ということなのでしょう。

<第14段落> したがって、1時間の労働は糸に「含まれる」ことになると思われます。

**第22段落** (206) 俗流経済学に通じている資本家はおそらく言うであろう。…

[22] 俗流経済学が価値増殖を解明できていないことを、前貸しした貨幣しか戻ってこなかつ

た資本家の繰り言という形で、紹介しています。

投機、商業、禁欲、自己消費目的の生産、他人へ貢献、監視・監督の労働、等々は、価値増殖の契機になりません。

しかし、資本家は自分では理由は分からなくとも価値増殖を実行しています。

**第23段落** (207) もっと詳しく見よう。労働力の日価値は3シリングだったが、…。

～ **第24段落** (208) われわれの資本家には、彼をうれしがらせる…。

[23] 労働力の日価値 = 3シリング は、労働力の生産に日々必要な生活手段の生産に 6 労働時間 (= 0.5 労働日) が必要なことを意味しますが、労働者を丸1日労働させることを妨げません。

労働力商品の独特な使用価値とは、それが持つ価値よりも多くの価値の源泉であることです。この、より多くの価値の取得は、「商品交換の永遠の法則」に従って実現されます。

労働力の売り手は、労働力の価値を実現してその使用価値を引き渡します。貨幣所有者は労働力の日価値を支払うので、1日間の労働力の使用は彼に属します。

[24] 資本家は12時間の労働過程の準備をします。原料と労働手段と労働力を用意して、12時間の生産過程を表にして整理すると、次のようになります。

前貸し	購入した商品	{対象化されて いる労働の量}	生産過程	生産物	{対象化され た労働の量}	価値
20 シ	綿花 20 lb	40 h	原料		40 h	20 シ
4 シ	紡錘 2/4個	8 h	労働手段	糸 20 lb	8 h	4 シ
3 シ	労働力 1日	6 h	労働 12h		12 h	6 シ
27 シ		54 h (= 4.5 労働日)	⇒		60 h (= 5 労働日)	30 シ

※ 単位 1 lb = 1ポンド、1 h = 1時間、1 シ = 1シリング、1労働日 = 12 h

※ 貨幣単位は、シリングに統一。(1 £ (ポンド) = 20s (シリング) = 240 d (ペンス))

※ レジュメの「紡錘1個」「2個」は、各々「1/4個」「2/4個」の誤植 (第7段落参照)。

こうして、前貸しの価値 27シリングは 30シリングに転化し、3シリングの剰余価値を生みました。すなわち貨幣は資本に転化しました。

◆今回読んだところと直接関係ありませんが、ロシアや中国における人間の平等に関連して資本の発展がまだ不十分なのかといった意見がありました。それぞれの社会の経済発展の状況を見なければなりません、アメリカなどを見ても分かるように、資本が高度に発展すれば人間の平等が実現できるという訳ではないようです。

※ 読み進んだページ数が多いので、いくつかの段落をまとめて要点を浮かび上げようとしてみました。段落のまとめ方が適切か、要点を的確に掴んでいるか、心配です。

# 「資本論を読む会」便り

2022.12.18 No. 69

前回に引続き今回も新しい参加者をお迎えいたしました。分からない所は遠慮なく質問して下さいと、議論が深まると思います。

さて、今回はあまり進みませんでした。第3篇 第5章 第2節 価値増殖過程 の残り部分を読み終わりました。

※ 編集人の復習ノート。報告や議論を踏まえて編集人はこう理解したということです。段落は、大月書店の全集版「資本論」本文の字下げで区切ります。段落名の後の小さい字は、(原著ページ番号)と、段落の出だしです。

## 第70回 第1巻 第3篇 絶対的剰余価値の生産 第5章 労働過程と価値増殖過程

### 第2節 価値増殖過程

前回は第24段落まで進みましたが、ここまでの所で剰余価値が生まれる秘密が明らかにされました。労働力の1日分の価値と、労働力が1日に支出する労働によって形成される価値とは、その量が異なり、ここから剰余価値が生まれます。

さて、前回読んだ中で、原著 202ページの第7段落に、

40ポンドの糸の価値＝40ポンドの綿花の価値＋まる1鍾分の紡錘の価値とあるが分かりにくい、労働の価値が入っていないので「＝」とするのはおかしい、と疑問が出されました。確かにこれを見る限りではおかしいです。

しかしこれは話の展開の途中なのでこうなっていると考えられます。

ここでの課題は生産物である糸の価値の計算です。まず最初に原料である綿花の価値が、次に紡錘に代表される労働手段の価値が、糸の価値に含まれるので、ここまでの所をまとめると先の等式になるわけです。しかしまだ完成形ではありません。

続く段落で綿花や紡錘の価値が糸の価値に含まれる仕組みを詳述した後、糸の価値の形成に紡績労働が加わることで、紡績労働が付け加える価値量が労働力商品の価値量を上回るように労働力が使用されること、と続き、糸の価値量の計算が終わります。

こうして剰余価値の源泉が明らかにされ、この節の課題が果されたこととなります。

なお、これに関連して、一般的な意識では機械が剰余価値を生むと考えられている、AIが価値を生むという議論が出ている、といったことも話題になりました。

今回は第25段落からです。

第25段落 (209) 問題のすべての条件が解決されており、しかも…

～ 第26段落 (209) 資本家は貨幣を新たな生産物の素材形成者または…

[25] 貨幣の資本への転化が実現しましたが、問題のすべての条件が解決されており、商品交換の法則は少しも損なわれずに、つまり等価物同士が交換されています。

3シリングの剰余価値を得る次の過程

貨幣 — 商品(綿花・紡錘・労働力)……使用価値を消費……商品(糸) — 貨幣

[27シ]            [価値通りに購買]                            [労働力の消費=商品生産]    [価値通りに販売]    [30シ]

は、

流通部面で行なわれる。(市場での労働力の購買によって条件づけられているから。)

と同時に、

流通部面で行なわれない。(流通は生産部面での価値増殖過程を準備するだけだから。)

のです。

[26]資本家は、

貨幣を新たな生産物の素材形成者(=労働過程の要素)として役立つ商品に転化すること、すなわち商品の死んでいる対象性に生きた労働力を合体することによって、価値(対象化されて死んでいる過去の労働)を資本(自己を増殖する価値)に転化させます。

第25段落について、レポーターから、4章 2節 20段落にある「資本は流通から発生することはできないし、また流通から発生しないわけにもゆかない」ことの具体的な説明になっていると指摘がありました。

第26段落の、

貨幣を新たな生産物の素材形成者として役立つ商品に転化する

とは、

貨幣を原料・労働手段と労働力に転化する

ことであり、このことによって、

貨幣を資本に転化する

すなわち増殖する価値となり、

$G-W-G'$

が完成します。

この段落では、「生きた～～」「死んだ～～」という表現がたくさん出てきて、初めて読むと分かりにくいです。労働や、価値の増殖は「動き」ですから、これを「生きている」と表現し、変化のないもの・変化が終わっているものを「死んでいる」と言っているだけです。そのように考えると特に難しいことを言っている訳ではなさそうです。

第27段落 (209) いま価値形成過程と価値増殖過程とを比べてみれば、…

～ 第31段落 (209) 労働過程と価値形成過程との統一としては、…

[27] 価値形成過程が、資本によって支払われた労働力の価値が新たな等価物によって補填されるまで継続されるだけなら、単純な価値形成過程です。

しかし、価値形成過程がこの点を超えて継続されるなら、価値増殖過程となります。

[28] 労働過程は使用価値を生産する有用労働の支出であり、質的に、その特殊な方法・目的・内容の観点から考察されます。

他方、同じ労働過程が価値形成過程としては、その量的側面からのみ現われます。労働過程に入りこむ商品も目的にそって作用する労働力のための、機能的に規定された素材的諸要因としてはもはや意義を持ちません。すなわち労働がその作業のために要する時間(=労働力が有用的に支出される継続時間)だけが問題となります。この時間は、生産手段に含まれているものと労働力によってつけ加えられるものとがあります。

[29] 労働は、使用価値の生産に費やされた時間が社会的に必要である場合に限り、計算に入るのですから、次のような条件を必要とします。

(1) 労働力は標準的条件のもとで機能しなければなりません。したがって、社会的に支配的な労働手段が用意され、社会的に必要な労働時間で生産されることが必要です。

例えば効率の悪い紡績機や品質の劣る綿花では、同じ量の糸を生産するのに社会的平均的な時間より多くの労働時間が必要になるが、この労働時間は価値を形成しません。

この条件の実現は資本家に依存します。

(2) 労働力そのものも標準的性格であることが必要です。すなわち、労働力が使用される部門で一般的な平均程度の技能と熟練と敏速さを持つ必要があります。

資本家はそのような労働力を買ったのであるから、この力が普通の平均程度の緊張をもって社会的に通例の強度で支出されるように、細心に監視します。また労働しないで時間が浪費されないようにも監視します。

(3) 原料や労働手段を無駄に消費しないことが必要です。

浪費された材料・労働手段は、対象化された労働の余分に支出された量を表わしており、この部分は価値を形成する生産物として認められません。

なお「この点についてはこの紳士は一つの独自の刑法典をもっている」

注(17)は、資本主義的労働との対比で、奴隷制のもので労働では敢えて不効率な道具を使用しなければならない理由を述べています。

[30] 商品の分析のところで、使用価値を作る労働と価値を作る労働との区別が明らかにされました。この区別は、生産過程の異なる2側面の区別(労働過程と価値形成過程)として現われます。

[31] 労働過程と価値形成過程との統一としては、生産過程は商品の生産過程です。

労働過程と価値増殖過程との統一としては、生産過程は資本主義的生産過程、商品生産の資本主義的形態となります。

ここでは第27段落が議論になりました。

まず価値形成過程と価値増殖過程の区別が少しややこしいです。

労働力の価値が3シリング(6労働時間に相当)であるとし、価値形成過程が6時間継続して終わったらこれは単純な価値形成過程です。価値形成過程がこの6時間を超えて継続されるなら価値増殖過程と言えます。

このとき、6時間になるまでの生産過程が価値形成過程、6時間を経過した後の生産過程が価値増殖過程、ということのようにも思えます。

しかしよく読み返してみると初めの6時間も含めて価値形成過程全体を価値増殖過程と言っているようです。

そこで価値形成過程と価値増殖過程の区別ですが、価値形成過程という場合、価値増殖過程も含まれるように思われます。次の第28段落で価値形成過程が出てきますが、その説明内容からみて価値増殖過程を除外していません。

あと、資本家が労働者を雇わずに自ら労働して生産する場合は価値増殖するのか、という疑問が出されました。この場合、労働力を購入していないので、原料や労働手段の価値と生産物の価値を比べることになります。価値増殖し得るように思われますが、そう結論して良いのかわかりません。このケースは労働力の購入がない点でこれまでの議論と条件が違うのでできっちり検討する必要があります。今後の宿題になりました。

特に議論はなかったのですが、第29段落の3つ目の条件のところにある「この点についてはこの紳士は一つの独自の刑法典をもっている」の意味は、労働者が原料や労働手段を少しでも壊したり使えなくしたら厳しく賃金から引き去って弁償させる、といったことなのでしょう。

**第32段落** (211) 前にも述べたように、資本家によって取得される労働が、…

～ **第33段落** (213) 他方、どの価値形成過程でも、より高度な労働はつねに…

[32] 資本家によって取得される労働が単純な社会的平均労働であるか、それとも、より複雑な労働・より高い特別な比重を持つ労働であるかは、価値増殖過程にとってはまったくどうでもよいことです。

複雑労働は、平均的な労働力に比べてより高い養成費が必要な高い価値を持つ労働力の発現であり、同一労働時間に比較的より大きな価値に対象化されます。

しかし、複雑労働であっても、その労働力の日価値を越えた労働部分が剰余価値となるので、単純労働と複雑労働の違いは価値増殖過程にとっては問題になりません。

[33] どの価値形成過程においても高度な労働は社会的平均労働に還元されるので、分析の単純化のために、資本に使用される労働者は単純な社会的平均労働を行なうと仮定します。注(18)は、複雑労働と単純労働の区分について、一部分には、単なる幻想、伝統的慣行による区別、労働者階級のある階層が自分たちの労働力の価値を闘いとる力を他の階層よりも弱めていること、などに基づくものがある、ということです。

第32段落は、第13段落で紡績労働が単純労働・社会的平均労働であると仮定した根拠を示しています。剰余価値が生まれるメカニズムは単純労働であっても複雑労働であっても同じだからです。

なお、複雑労働については、第1章第2節に「単純な労働が数乗されたもの、またはむしろ数倍されたものとみなされる」とあり、単純労働に還元されるということでした。